

# 学び続ける学校

別海町立別海中央中学校 校長室便り

発行 校長 青坂信司

第02号 平成27年6月4日(木)

※今日の言葉「伸びる教師は、全員の子供を何とかしようと思っている。そして、できない子に対して優しい」

## 「授業の骨格」とは・その1

- ◆今年度、中央中に若い先生が増えた。また、今は教育実習生が2名来ている。若い世代の教師が、一人前に育っていくことがこれからの教育を考えたとき大切なことだ。子供たちにとっては、教師が最大の環境だから、なおのこと若い先生方には育ってほしい。
- ◆教育実習生に一時間話をするようになった。教育目標や教師のあり方について何事かを語れというわけである。教育実習生や若い教師が着任すると、大体どこの学校でも、一番最初に校長が一時間程度話す。その後、教頭先生、各担当が順次話して研修を深めていく。私は、この一時間抽象的なことを若い世代に話しても理解してもらえないので、できるだけ具体的なこと、授業に直結したことを話すようにしている。
- ◆パワーポイントを使って、授業の動画を見せる。30秒ほどである。そして、若い先生方に聞く。  
「授業を見て、気がついたこと、わかったこと、不思議に思ったことを発表してください」  
若い先生方は言う。  
「先生の声が明るい」「生徒がしっかり発表できている」「発表させるときに生徒を起立させた」など、教師でなくても誰でもが答えられることだ。それが悪いのではない。そこからが教師としてのスタートなのだ。
- ◆「もう一度見てもらいます。今度は授業を分析してみてください。授業を分析できるというのは、これからの教師人生にとって自分自身の力で授業を改善していくために必要なことです。」  
若い先生方は、分析しようとしてもなかなかできない。当然である。授業を分析するための尺度を持っていないからである。授業を分析するためには、「分析のものさし」「分析の観点」を持たなければならない。それにはいくつかあるが、もっとも大切なことがある。基本中の基本ともいうべきものである。家には柱・人間には背骨があるように、授業にも骨格がある。この骨格を理解すると、授業の大枠もそれなりに見えてくる。
- ◆授業の骨格とは、「教師の教授活動」と「子供の学習活動」で成立しているということだ。教師は、子供に何事かを教える。子供は何事かを学ぶ。そして、授業の骨格をもう一つあげるとすれば「教師の評価活動」である。この「教師の教授活動」「子供の学習活動」「教師の評価活動」の繰り返しの中で、子供は知識・技能を習得し、学びを深め、学びを他に転移させていく。最終的には、教師の教授活動や評価活動がなくても、自分自身の力で学習活動を成立させていくようになるのである。
- ◆若い先生に聞く。「それでは、この三つの中で最初にあるのは何ですか」若い先生はすぐに答える。「教師の教授活動です」「その通り。この最初の教師の教授活動が適切なものでなければどうなりますか」「子供の学習活動がうまくいきません」「その通り。それでは教師の教授活動の具体的なものは何ですか」このような問いかけを若い先生方にしながら、自分自身も今一度教師の仕事の基本を再確認している。

【次号に続く】